

令和 5 年 6 月 22 日現在

機関番号：17401
 研究種目：基盤研究(B) (一般)
 研究期間：2018～2021
 課題番号：18H00625
 研究課題名(和文) ナポリの劇場(音楽・演劇)史構築にむけての、18世紀公証人文書史料の重点調査

研究課題名(英文) Focused Research on 18th Century Notarial Documents for the Construction of the Music and Theatre History of Naples

研究代表者
 山田 高誌 (Yamada, Takashi)
 熊本大学・大学院人文社会科学研究部(文)・准教授

研究者番号：10580665
 交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 5,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、ナポリ公文書館に保管されている公証人文書に着目することで、18世紀後半のナポリの民間劇場の再構築を行おうというものであった。具体的には、劇場主と興行師間の契約を行っていた公証人の記録を発掘調査するものであり、特に、1760-1790年代にかけて活躍した2人の公証人 Nunziante Abbate、Gaetano Manducaの文書を時系列ですべて解読し、劇場と音楽に関わる記録を面として明らかにすることをその中心的な課題とした。
 コロナ禍での中断があったものの、劇場運営に関わる大量の興行史料群、観客名簿、年度会計史料、さらには初となるフィオレンティーニ劇場の内部図の発見へと繋がった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
 マスメディアとしての18世紀オペラを考える際、その作品の真意はパトロンや観客と興行師の関係の中で読み解く必要があり、台本と楽譜からの検討では不十分である。
 本研究は、私文書でありながらも公的にその真正性が保証されている「公証人史料」に現地研究者に先駆け着目することで、アーティストや劇場契約のプロセスから年度収支簿、観客の氏名、興行師に出資していた商人の活動などまでをはじめて解き明かすことができた。これらの成果は、これまでのオペラ史、劇場史を新たに塗り替えるほか、三次元的な舞台再構築のための基礎史料として国際的にみて重要な意義をもっている。

研究成果の概要(英文)： This study aimed to reconstruct the Neapolitan private theatre of the late 18th century by focusing on notarial documents held in the National Archives of Naples. Specifically, the project was to discover the records of the notaries who were in charge of contracts between theatre owners and impresarios, and in particular to decipher the documents of Nunziante Abbate and Gaetano Manduca, two notaries active between the 1760s and 1790s, in chronological order, in order to reveal the records relating to theatre and music in their entirety.
 Despite the interruption caused by the Corona disaster, the project led to the discovery of a large number of imprenditorial contracts, audience lists and annual accounts relating to the theatre's operations, as well as the first-discovered internal plans of the Teatro de' Fiorentini.

研究分野： Musicology, history of opera and theater

キーワード： italian theater opera history notary documents comic opera impresario public theater Cimarosa theatrical contracts

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

研究実施者は、18世紀のナポリの音楽文化における「喜劇オペラ」のジャンルについて、台本と楽譜、興行の観点から多角的に調査をすすめ、とりわけ1760年代から1790年代にかけてその上演の場となった2つの主要民間劇場（ヌオーヴォ劇場、フィオレンティーニ劇場）の“高踏化”を、経済史的側面から実証してきた。

その中で、ナポリの民間劇場とそこで上演されていた喜劇オペラ群は単なる娯楽などではなく、ニュース、コマーシャルのようなマスメディアとして、同時代の社会情勢を背景にある思想や政治的指針を広く伝え、世論を形成させるための戦略的なコンテンツであったであろうことを読み取ってきた。

この仮説をさらに具体的なレベルで検証するため、劇場経営者やパトロンの個人活動に関わる私文書の発掘を模索してきた。

ナポリは第二次大戦中にドイツによって爆撃され、多くの宮廷劇場関連文書を収めていたナポリ公文書館は多くの史料を失ったが、その中には、おそらくは存在したであろう民間劇場関連文書も多く失ったものと考えられる。その後劇場に関する実証研究はほぼ行われてこなかったが、1990年代になるとナポリの研究者によって、失われたと思われる史料のさまざまな“バックアップ”史料の存在が紹介され、劇場史再構築の可能性が提示されてきた。2001年から研究実施者はナポリ留学を開始（～2008）するとともに、それら研究で示唆されていたナポリ銀行歴史文書館史料の調査を行ってきた。

この調査を通して数千点にわたるナポリの民間劇場関係の銀行換金文書を発見し、劇場史の構築を一定程度可能としたものの、その背景に存在した「契約書本体」なしには、砂をもって地図を描くような状況であることにもまた気付くことになる。そこで、それら換金記録に稀に記されていた契約を行った公証人の署名を手掛かりとして、公証人文書の調査を試みようとしたが、当時、公証人史料は、イタリア司法省管轄の「ナポリ公証人文書館」に保管されており、学芸員も1人しかいない状況で、調査には多大な時間がかかりその成果はわずかであった。

このような状況の中、2015～17年にかけて同史料群が「国立ナポリ公文書館」へと移管され、2017年秋から一般への公開が開始されると、新たにカタログが整備され、翌日には史料閲覧が可能となったことから、本研究テーマの提起へと至った。

公証人文書は、その証言の詳細さ、正確さから様々な歴史領域での重要な一次史料とみなされているが、ナポリを対象とする音楽学/演劇学領域の研究においては誰も行っておらず、国際的にも十分なインパクトが予想されるものであった。

2. 研究の目的

本研究の主眼は、17、18世紀のヨーロッパの音楽文化の一大拠点であったナポリの劇場運営システムを総合的に明らかにするほか、楽譜校訂作業、オペラ復活上演といった種々の実演を含む国際共同研究へと展開させるための基礎史料を提示することにある。

劇場・音楽史研究の領域において、ナポリの公証人史料については、上述したように史料へのアクセスが非常に制限されてきたため（申請から閲覧まで2か月かかり、2015-17年は移転のため公開中止）、さらには同時期に活躍した公証人が数百人おり、その中の誰が民間劇場関連の契約を担っていたか、対象の同定が困難だったためである。

申請者は、先行する科研費による調査研究において、劇場契約に特化した複数の公証人を同定してきており、まずはそれら史料の調査を主たる目的とした。

3. 研究の方法

研究の方法は、上記国立ナポリ公文書館に収められる史料発掘が中心となる。18世紀中にナポリ市内で活躍した公証人は1,000人近くにも上り、その中から劇場近くにオフィスを構え、劇場関係者が頻りに契約のために利用していた数人の公証人文書を時系列で全頁に目を通し、劇場活動に関わる関連文書を発掘、転写、そして解読していく方法をとる。

4. 研究成果

期間中、コロナ禍により現地調査を2年以上遂行できず、予定していたアウトリーチイベン

トを中止するなど大幅な計画変更を余儀なくさせられたが、延長年度の最終期となる 2023 年 2 月に再度発掘調査を行い、2018 年年度から始まる本研究期間全体においては、複数回、計 3 カ月近くにわたりナポリでの調査を実施、さらに研究関連となる他地域(フォッジャ、メッシーナ、レッチョ・ディ・カラブリア、マテーラ、ビトント、ヴェネツィアなど)を訪問することができた。

その結果、当初の目的としていた公証人 Gaetano Manduca、Nunziante Abbate の二人については、彼らの活動期間に残したすべての年度文書 (Manduca: 1746-1779 計 33 冊 ; Abbate: 1756-89 計 31 冊) のうち、1766 年度以降については全巻全頁調査を完了することができた。

なお、これら契約文書の“事務所控え”となるこれら冊子には、当該公証人(事務所)が年度中に行った契約文書がすべてまとめて転記されており、以下に図で示すように一冊あたり 1,000～4,000 ページ近くの大部となっている。

----- 【図版 1】

そのため、まず研究対象としている 1766 年以降の調査を優先的に行った。

これらの調査と並行し、換金記録に名前が挙がっていた公証人 Lorenzo Tufarelli, Pietro Di Roma, Carlo Manduca, Benedetto Balsamo, Francesco Manduca らの調査も試みたほか、ナポリ公文書館に収められる民間劇場に関わる史料群(具体的には、「Archivio farnesiano フェルネーゼ(パルマ王家)史料:サン・カルロ劇場収支簿」、「Archivio di Maresca Serra Capriola: マレスカ・セッラ=カプリオーラ(侯爵)史料:1834-40 年第一のフィオレンティーニ劇場関連文書」、「Archivio Caracciolo di Santo Bono: サントボーノ・カラッチョロ(公爵)史料:1825 年度フィオレンティーニ劇場関連文書」など)、それからナポリ愛国史図書館 Biblioteca “Storia Patria” に所蔵される 19 世紀を通して発行されていた「(ナポリ)劇場日々時報」の調査なども行い、総合的な劇場史料調査の基礎を作ることができた。

まず、主目的となる公証人文書のうち、上記二人の公証人の 20 年間分近い史料からは、総計 300 点以上の世界初出となる文書群を同定し、記録を行うことができた。

これら記録群を通して、これまでの先行研究で全く不明であった 1770-80 年代のフィオレンティーニ劇場の運営について、複数の興行師が失敗を重ねつつ数年おきに交代し、主に「フランス系商人」からの出資を得て興行を行う様子を時系列で明らかにすることができた。さらには、フィオレンティーニ劇場の観客名簿、座席位置、ヌオーヴォ劇場、およびフィオレンティーニ劇場年度会計収支報告書、そして、フィオレンティーニ劇場の 1778 年時点の改装完了後の内部図面【図版 2 参照】なども世界に先駆け発見し、つまり劇場と観客、そして舞台そのものを歴史としてのみならず、立体的に再構築する多くの情報を得ることができた。これら成果は、19 世紀のナポリの哲学者で歴史家であった Benedetto Croce の《ナポリ劇場史》(1916)以降、連綿と積み重ねられてきた「ナポリ劇場史」に大きく寄与するものである。

なお、研究期間中にその発表を十分に行うことができなかったとはいえ、近い将来の著作、国際学術論文含め、様々な貢献を果たす研究を形成できたことは確実である。

以下、発見した史料群より、特筆すべき事項についてトピックを提示してみたい。

1. フィオレンティーニ劇場興行の詳細について (1770～94)
2. フィオレンティーニ劇場改装工事と内部図 (1777～78) ----- 【図版 2】
3. ヌオーヴォ劇場興行詳細について (1766～90)
4. 歌手グループ全体との年度契約の詳細 (1766)
5. 様々な演劇団への又貸しとその契約実態 (1767～92)
6. オペラ興行師たちのキャリア、家族、副業について

1. については、以下のように報告を行った。

- 学会報告: 山田高誌「ナポリ公証人史料調査に基づく民間劇場の経営トラブル、観客の解明—動乱の 1779～83 年度・フィオレンティーニ劇場を中心に」日本音楽学会西日本支部第 50 回例会 (九州大学、2020/7/11)

2. については、以下の報告を行う予定である。

- 学会報告: 山田高誌「公証人記録群から明らかになったナポリ・フィオレンティーニ劇場の姿～興行師、観客、レパートリー、そして 1778 年改装時の内部図面の発見より」イタリア学会第 71 回大会 (大阪大学、2023/11/4)

3～6 については別途発表準備を進めているが、特にオペラ中の合唱については合唱団がいたわけではなく、ソリスト陣が衣装を替えて二人一役として歌っていたこと、また 1780 年代末になってもオーケストラ(特にレチタティーヴォ)の固定メンバーとして「リュート奏者」が雇用されていたことなど、実演に関わるさまざまな新発見を得ることができた。

さらに将来的に重要となる発見は、「首都ナポリ」を起点として、プーリア、カラブリア、シチリアとの音楽家の巡業などの事例を多数発見したことである。具体的には以下に示すナポリ王国内での音楽家と演目の“循環”であり、それらを担った人物は、音楽院を出たばかりの“若手”の駆け出し、あるいはナポリという首都で経験を積みながらも成功をおさめることのできなかった人々が中心となっており、これらを通して南イタリア全土のサウンドスケープの実態の再構築という新たなテーマを得ることができた。

調査において、具体的に明らかにした事項を以下に列挙する。

- i) プーリア州フォッジャ市におけるオペラ巡業 (1773、1776、1781)
- ii) カラブリア州コゼンツァ市、ロッサーノ市におけるオペラ巡業 (1778-79)
- iii) シチリア島エンナ市の大聖堂楽団への音楽家リクルート事案 (1784)
- iv) シチリア島メッシーナへの歌手の巡業 (1784)

上記 i) については、フォッジャ市税関でオペラ上演が行われたため、フォッジャを訪問し当該施設における上演場所の調査を行ったほか、フォッジャ文書館、フォッジャ音楽院で関連資料の調査を行い、以下の学会発表を行った

- 学会報告：山田高誌「旧ナポリ王国南部地域のオペラ巡業ルートの存在—首都ナポリからコゼンツァ、フォッジャへの道を事例として—」九州音楽学会 2021 年度大会 (福岡教育大学・オンライン、2021/12/20)

上記 ii) については、以下の論文として発表し、コゼンツァ市公文書館に残される「招聘側の公証人文書」と照らし合わせながら、ナポリからの巡業の実態、さらには現時点で現存している南イタリア各州の“中小都市”それぞれの音楽劇記録を一覧化し、基礎情報を作成した。

- 査読論文：山田高誌「ナポリ王国南部地域における音楽劇上演の実態解明にむけて — 1777-78 年、カラブリアへの喜劇オペラ巡業契約を中心事例として明らかにする“定期巡業ルート”の存在の同定と、それを担った“アーティスト”の実像」、『九州地区国立大学教育系文系研究論文集』, 8-2 (2022), No.3, 64p.

上記 iii) については、以下の場で報告を行った。具体的には、ナポリにおいて楽長として雇用された作曲家ジュゼッペ・コッポラはじめ、楽団員それぞれの職務とその後のキャリアの再構築を行い、ナポリを起点に王国下の文化と人の“循環”を明らかにした。

- 学会報告：山田高誌「“巡業”によって支えられたイタリア中小都市の音楽劇、教会音楽：1784 年、シチリア中部・エンナ大聖堂の音楽家リクルート契約に着目して」日本音楽学会第 73 回全国大会 (西南学院大学、2022/11/27)

上記 iv) については、以下等の機会などで報告を行う予定となっている。

- 研究報告：山田高誌「ヴィルトゥオーゾ、そして“村々の歌手”。公証人記録から追う 18 世紀の南イタリアの音楽劇、歌手たちの実像」二期会イタリア歌曲研究会 (オンライン、2023/11/18 予定)

さらに、ナポリを起点とする南イタリア全体への音楽家とレパートリーの還流についてより詳しく検討するため、軍港の街で劇場活動が非常に盛んであったシチリア島・メッシーナの劇場史を再構築するため、現地メッシーナ・マルゲリータ劇場付属文書館において、18 世紀～19 世紀にかけての同地のオペラに関する史料調査を行い、上演台本、劇場内部図と予約観客者一覧、契約文書群の確認と撮影を行った。

他に派生する研究成果については以下の通りであり、現地研究者との交流を進めている。

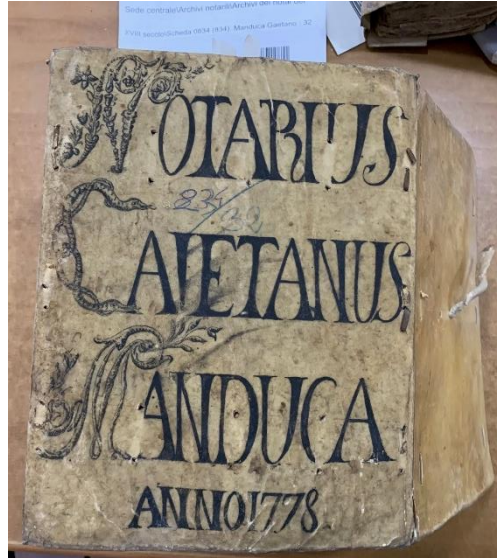
- 学会報告：Takashi Yamada, “Di Duni la prima opera rappresentata in Giappone. Un progetto da Matera al Giappone,” Giornata di Studi di Inaugurazione del Progetto: “Duni da Matera al mondo: Lo stato delle ricerche e le prospettive internazionali”, Sala convegni della Chiesa di Cristo Flangelato— Conservatorio di Musica di Matera “Egidio Duni” (国際研究集会:「マテラから日本へ—日本で初めて上演されたオペラ」、クリスト・フラアンジェラート教会広間—イタリア国立マテラ音楽院), 2018/6/10
- 学会報告：Takashi Yamada, “Duni a Nagasaki, l’ultima tappa della circolazione di *Les deux chasseurs* del 1820,” XXVI annual conference, Societa’ italiana di Musicologia (イタリア音楽学会第 26 回全国大会), Conservatorio di musica di Matera (マテラ音楽院), 2019/10/19

●記事：「十八世紀、”異国物”オペラとその衣裳」新国立劇場機関紙『ジ・アトレ』, 2022/5, pp.10-11.

●記事：「オペラの社会的役割を探る音楽学者の“役割”—ナポリの喜劇オペラに迫る—」藝術文化雑誌（丹波古陶館）『紫明』 vol.52, pp. 82-87.

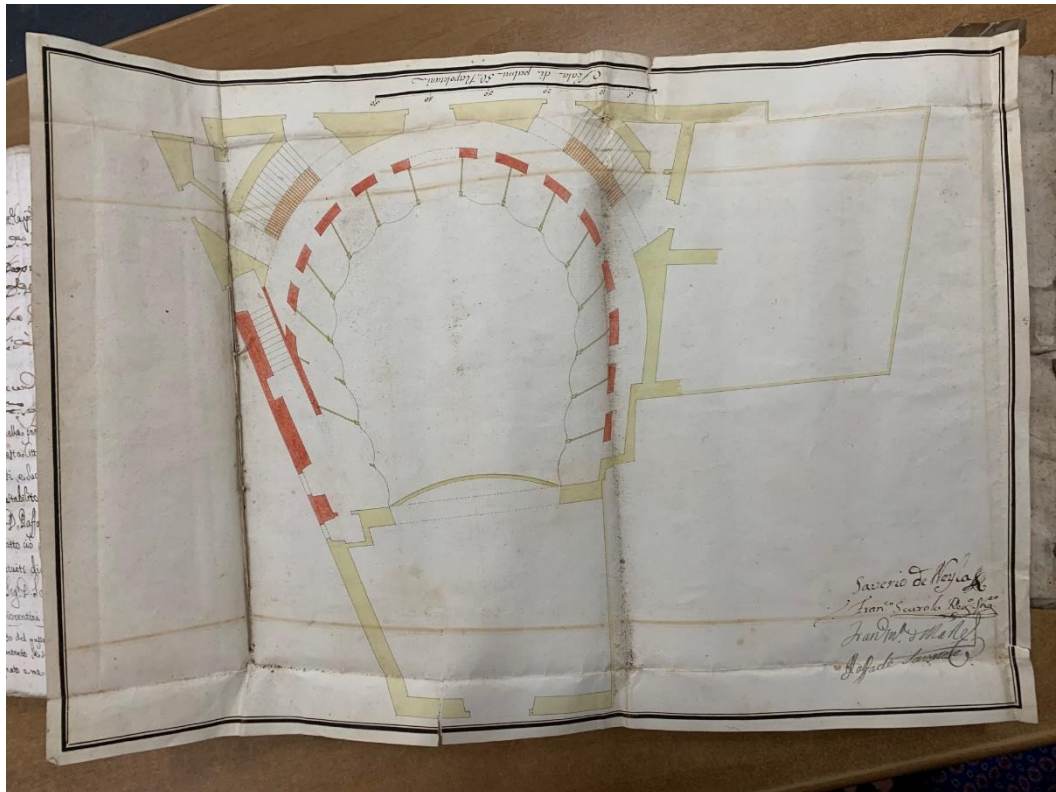
以上

【図版 1】 公証人文書例（左: ASN, Notai Sec. XIII 834, Gaetano Manduca, vol.20, 1766 本体全体; 右: 同公証人史料, vol. 32 (1778) 背表紙）



【図版 2】 新発見されたフィオレンティーニ劇場内部図（1778）

ASN, Notai Sec. XIII 834, Gaetano Manduca, vol.32 (1778), fog. 510v-529f



5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 山田高誌	4. 巻 8-2
2. 論文標題 ナポリ王国南部地域における音楽劇上演の実態解明にむけて 1777-78年、カラブリアへの喜劇オペラ巡業契約を中心事例として明らかにする“定期巡業ルート”の存在の同定と、それを担った“アーティスト”の実像	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 九州地区国立大学教育系文系研究論文集	6. 最初と最後の頁 1-64
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 山田高誌	4. 巻 15
2. 論文標題 映画、テレビ、オペラをめぐる「芸能史料」の現在～元NHK プロデューサー・後藤田氏資料発見に寄せて～	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 総合文化学論輯	6. 最初と最後の頁 78-84
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15017/4776873	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 山田高誌	4. 巻 なし
2. 論文標題 “古様式”宗教曲の復権～アレッサンドロ・スカラルラッティ《聖週間のためのレスポンソリウム》コンテクト理解と作品鑑賞のための手引き	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 エクス・ノーヴォ室内合唱団演奏会Vol.11「アレッサンドロ・スカラルラッティのレスポンソリウム」プログラム	6. 最初と最後の頁 3-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 山田高誌	4. 巻 5
2. 論文標題 十八世紀、“異国物”オペラとその衣裳	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 ジ・アトレ	6. 最初と最後の頁 10-11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計9件（うち招待講演 4件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 山田高誌
2. 発表標題 ナポリ公証人史料調査に基づく民間劇場の経営トラブル、観客の解明 動乱の1779～83年度・フィオレンティーニ劇場を中心に
3. 学会等名 日本音楽学会西日本支部第50回例会（九州大学）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 山田高誌
2. 発表標題 オペラ・映画向け諸劇場の史料の種類と調査・保存に関わる諸問題：イタリアを中心事例として
3. 学会等名 科研シンポジウム<パブリックカルチャーにみる音楽教育コンテンツー 過去・現在・未来>（熊本大学）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 山田高誌
2. 発表標題 旧ナポリ王国南部地域のオペラ巡業ルートが存在 - 首都ナポリからコゼンツァ、フォッジャへの道を事例として -
3. 学会等名 全九州音楽学会（福岡教育大学）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 山田高誌
2. 発表標題 19世紀後半、ナポリ楽派復権への道のり
3. 学会等名 第9回ジャパン・アブリア・フェスティヴァル（イタリア文化会館東京）（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Takashi Yamada
2. 発表標題 Duni a Nagasaki, L'Ultima tappa della circolazione de Les deux chasseurs et latiere del 1920
3. 学会等名 イタリア音楽学会 (SI dM) 全国大会 (マテラ音楽院) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 山田高誌
2. 発表標題 音空間を再構築するための公証人史料 ~ 18 世紀後半のナポリの事例から
3. 学会等名 公開シンポジウム「近代の“音”と“声”のアーカイブズ ~ 種々のメディア領域での取組と、熊本におけるこれからの展望 ~」(熊本大学) (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 山田高誌
2. 発表標題 西洋音楽の翻訳の出発点 ~ 1920年出島での“感動”をきっかけに
3. 学会等名 公開シンポジウム「明治日本の文化形成における「翻訳」音楽を中心にその意義を考える」企画立案、運営、パネリスト、講演「明治期の唱歌教育における翻訳唱歌と国民形成」(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Takashi Yamada
2. 発表標題 Di Duni la prima opera rappresentata in Giappone. Un progetto da Matera al Giappone
3. 学会等名 Giornata di Studi di Inaugurazione del Progetto: “Duni da Matera al mondo: Lo stato delle ricerche e le prospettive internazionali”, Conservatorio di Musica di Matera “Egidio Duni”, 2018/6/10 (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 山田高誌
2. 発表標題 “巡業”によって支えられたイタリア中小都市の音楽劇、教会音楽 :1784年、シチリア中部・エンナ大聖堂の音楽家リクルート契約に着目して
3. 学会等名 日本音楽学会第73回全国大会（西南大学）
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 Vito Clemente, Dinko Fabris, Takashi Yamada, 他	4. 発行年 2018年
2. 出版社 Terra, Molfetta, Digressione Music	5. 総ページ数 18
3. 書名 Il salotto musicale di Puglia: Due secoli pieni di talenti	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 公開シンポジウム「近代の“音”と“声”のアーカイブズ ～種々のメディア領域での取組と、熊本におけるこれからの展望～」	開催年 2019年～2019年
--	--------------------

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関